



R. Melzack 著

The Puzzle of Pain

日々のセラピーを通じ、患者とわたくし達の拘わりで大きな比重を占めるのが痛みの問題である。器質的な疾患に対しては外科的療法があり、また薬理療法もしかりである。しかし、いくら近代的処方を実施しても尚かつ患者と治療者、双方を悩ますのが除痛あるいは疼痛軽減の問題である。セラピストの主たる業務は、機能の改善と維持を如何に獲得教授させるか、に目標が集約されているが、この責務を全とうするには痛みの問題を抜きにしては考えられない。ここに紹介する本は、現在カナダに在留し活躍している辻井洋一郎君 (RPT) が送って呉れたもので、是非とも一読すべき本である、との P.S. つきである。ページをめくるにつれ、確かに痛みに対する諸々の問題点が浮きぼりにされ、臨床で遭遇する患者の様相と近似するのに驚かされる。著者は gate control theory を体系づけた、今日痛みのメカニズムが話題に

なる場合には、必ずと言ってもよいくらい引き合いに出される、心理学者である Prof. R. Melzack である。

本の表題のごとく著者は一痛みのなぞと題して痛みの複雑な仕組に関し一般論的にとらえることに始まり、痛みの心理的考察を解説し、さらに痛みの臨床側面—主に幻肢痛 phantom limb pain—に重点を置いているが痛みのなぞはどうやらここにありそうだと、著者は言わんばかりである—へと進展する。

切断された四肢の痛みが、どうして感じられるのか、確かに不思議であり著者の見解が如実に伝わってくる。以下、痛みの生理学、痛みの理論、痛みの gate-control theory、痛みの control の章へと続く。特にページを割いているのが痛みの生理とその理論の変遷過程の章であるが、著者 Melzack と Wall が体系づけた gate-control theory を理解するには恰好である。治療あるいは control に関してはそれ程言及していないが、痛みのメカニズムを把握し治療手段を再考する為に参考になる本である。

(Penguin Education 232頁)

(自治医科大学附属病院リハ・センター 谷岡 淳)

フィリップセルビー著 「Health in 1980-1990」

(医療の未来像 若松栄一 監修)

本著の魅力は何といってもその内容にある。厚生省地域保健課の片隅で大谷課長より是非 PT, OT の皆さんにも紹介して下さいとすすめられたのが7月の初旬であった。これは国際赤十字の Henri Dunant 研究所と Sandoz Ltd が健康及び保健医療に関する将来予測を企画したことから編集に至ったといわれる。世界で健康及び保健医療に実際に関与する専門家 62 人がこの企画要請に応じ日本からは本著訳の監修者である若松栄一氏 (元厚生省医務局長) が参加された。日本語訳には5人の諸氏による医療の未来像と題した座談会が附記されており、それが45頁にわたって日本の状況にあわせ乍ら座談されている点は特に興味深い。

内容は1部に疾病と保健医療の制度に対して将来の予測をたてたものであるが、疾病はがん、心臓血管病、精神疾患、神経痛、老化過程、遺伝性疾患、ウィルス性疾患、性病等がとりあげられている。更に予防、リハビリテーション、自然環境と社会環境、社会業、健康の概念等があげられている。II部では保健医療の制度と題して、医師や保健医療関連職員、ヘルス・サービスの将来についての予測、また保健医療専門職のための情報やそれにちなんだ国民の教育の情報について述べられている。

る。更に保健医療の費用や産業の役割について、言及されている。

誰もが将来について知りたがるが私達の関係する医療について述べられているこれ等の実に具体的な予測には関心をこえた緊張感さえ禁じ得ないものがある。健康については医療職者のみではない誰にも関係のある問題として関心がよせられるべきである。胃癌には血清学的診断が早期発見キャンペーンに革命をもたらすだろうといわれ、20年後までには癌の70%くらいまでは何らかの対処が可能になるであろうともいわれている。われわれ PT, OT の将来についても看護婦の形態の変化についても予測がいられている。リハビリテーション医療と障害者、その雇用関係、保健医療関連職員の役割等、何か10年、20年後の姿が浮きぼりにされているようである。座談会の部はまた日本の現状に比較討論されており問題は実に身近なものになってくる上、何といっても5氏のそれぞれの意見が興味深い。これは絶対に1人で書ける本ではない。是非御一読をおすすめしたい。

(A5, 202頁, メディカルフレンド社刊)

(リハビリテーション学院, 作業療法士 矢谷令子)